

倭人の言語とその展開

『長田夏樹論述集（下）』第21章

（原載：『謎の四世紀』，毎日新聞社，1974年5月）

1970年代に鈴木武樹氏が主宰していた「東アジアの古代文化を考える会」での講演の記録。この会の活動報告は、シリーズ名は冠していないが毎日新聞社から十数冊刊行されており、『謎の四世紀』はそのうちの一冊。同書にはまた「謎の四世紀とその前後」というテーマのシンポジウムの口述筆記録も収録、長田先生のコメントもあるが、この部分は『邪馬台国の言語』、『著作集』いずれにも収録されない。

先ず日朝同系論につき先行研究と問題点を紹介、次節では「倭人伝」に見える固有名詞から当時の日本語の発音を探る。そこに反映する中国語は三世紀の洛陽方言であるとし、実際の地名の発音との対応や梵漢対音などを基に中古模韻相当韻の当時の発音は[a]であり、「卑弥呼」はヒムカと読むべきと断ずる。この主張は先生独自のもので、今なお異彩を放つ。「弥」をムと読むことについては、十分な説明は無い。同内容の記述がある「邪馬台国の言語」（『著作集（下）』第20章）でもなお分明でない。「弥」は中古では「卑」と同じく支韻重紐Aであるが、董同龢などは上古では「伊」（中古脂韻重紐A）などと同じく脂部所属とする。推定音価から推測するに、先生は三世紀の洛陽では「弥」、「伊」が同じ韻母を持ち、それが当時の日本語の母音ウを写すに相応しい音価だったとお考えなのであろう。異論が出そうなところである。三世紀というと中国語音韻史もまた空白の時代で資料は乏しい。先生は洛陽音の体系を提示することなく、実に簡単に済ませているので、読み手としてはヒミカではなくヒムカとするのは「日向」という地名が先にあるからとつい勘繰ってしまう。

その次の節のサ行音の発音の違いによる方言についての指摘、及び最終節での日本語方言は大陸にあったときに既に存在していて、それを話すグループが漸次日本に移り住んで日本列島の方言分布を生んだという主張は概ね第30章と内容的に一致する。先生の壮大な持論である。

（太田斎）